番外編

褒めることを知らない妻②

土居　修

いつしか師走。待ち望んでいた「おーいお茶」一箱と賞金が送られてきた。5千円は財布にしまい込んだが、自作の句（潮騒を聴いてあなたは海となる）がラベルとなっているペットボトルは見飽きることがない。感慨深いものが湧き上がってきて、数本のそれを抱いて眠りに就いた記憶。私の「青春」から届くであろう便りの数々に随喜の涙を流す夢までも見ることができた。

「それにしても爽快な気分で朝の食卓に座っている私に妻がいった。

「なに」と私。

冬空からは穏やかな光。至福の時間が流れていく予感。私を褒めるであろう妻をこよなく愛おしいと思いながら、極めて朗らかにと応じてみせた。

「すごいことよね」

「だろう。私の文学的才能を褒めるべきだね」

この時期の朝食は永谷園のお茶漬け海苔にお湯を注いで練りワサビを溶かし込み、それに焼いた餅を入れて食することが定番となっている。決して豪華とはいえないが、私にとってのソールフード。その朝は愉悦と矜持を抱いて食するはずであった。

「そうじゃないの。約200万の句から、どうやって入賞を決めるのかしら。すごいと思わない」

「えっ、そのことなが」

「そうよ、ほかになにがあるというの」

滑らかに喉元を過ぎていくべき焼餅が咽頭で凝固した。一瞬の嚥下障害。妻がにこやかに頬張っているセブンイレブンの「しっとりたまごむしぱん」にも不快感が募ってきた。まずは私を褒めるべきではないのか。褒めることを知らない妻。丁寧に焼餅を噛み砕き、恐る恐る飲み込む。

味気なかったが、いわれてみれば膨大な作品から上位の2千句を選び、さらに賞金対象の約3百句に絞り込む審査員の熱量は確かに天晴れというしかない。

「天晴れって、こういうことなのよね」

私のこころを見透かして、恍惚とした表情を浮かべている女に奇立ちをおぼえながらも、反論できない男の哀れさ。庭の冬木の凛とした姿も恨めしかった。

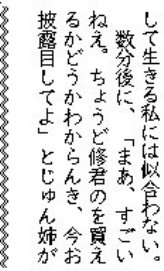
その日から数日後の深夜。大阪府在住の○○○美智からLINEがあった。

「この前、父の92歳の誕生日のお祝いで高知に帰っているとき、ラジオからエレファントカシマシの宮本さんがソロアルバムに入れている『あなた』の曲が流れていました。ボーと聞いていると、何故か須高のころの土居君や○○君の顔が浮かんできて、めっちゃ懐かしくて心はあの頃にもどっていました。（中略）今夜、ふと思い立って宮本さんの『あなた』を聴いたので、夜遅くLINEしてみました。夜分遅くごめんね」

私は高校時代から彼女を「みち姉」と呼んで親しんでいる。かけがえのない想い出も少なくない。3年次の体育祭の後夜祭でのフォーク・ダンスもそのひとつ。白組応援団長の権威を盾にしてオクラホマミキサーを繰り返し流させ続け、彼女とのペアを崩すことなく踊り狂った青春のひとコマ。黒髪の甘い香りとふくよかな胸の隆起の感触は未だに忘れ難い。猛々しい血潮を沸騰させていた少年は今も私の裡に佇んでいる。

彼女を含めかな姉（○○香奈子、京都府在住）、じゅん姉（○○淳子、大川副会長の妹）と4人でつくる「須高OBお笑いクラブ」というLINE。ひとりが送信してくると、待ち構えていたかのように盛り上がり、「お元気で」などと勇気あることばを誰かが記さない限り、終わることはない。

潮騒を聴いてあなたは海となる



がラベルのペットボトル

翌日の日曜日、午前7時25分を最初にして35を数えるラインが記録され、最後は午後9時6分のみち姉の勇気に続き、22分後のじゅん姉のスタンプで終わっている。異様ともいえる一日であったことを銘記しておきたい。

午前11時50分、私は意を決して「都道府県賞」の受賞を送信した。自慢したかったのではない。あくまで近況報告の一環。他者に賞賛を請うがごとき行為は男の美学を標榜して生きる私には似合わない。

数分後に、「まあ、すごいねえ。ちょうど修君のを買えるかどうかわからんき、今お披露目してよ」とじゅん姉が送ってきた。しかし、どうにも意味がわからなかった。その直後のみち姉のことばが「すごいねえ。やっぱ文学的才能は年をとってより伸びるんやね」。それから35分後にかな姉からも届いた。「お茶は伊藤園です。しかし、土居君。あなたは社会で、緻密に評価される人ですね。そのような友だちがいることは私たちも誇りですね。お茶買ったら探すね」。

昼食のチャーハンを満喫した後、コーヒーを飲みながら、妻に「須高OBお笑いクラブ」の午前中の顛末を話した。

「そう、よかったじゃない」

さりげないひと言。褒めることを知らない女に背を向け、滂沱の涙に溺れていく。

「買い物に行くから、遅くならないうちに洗濯物を取り込んでね」

何事もなかったかのように宣う女。不意に、岡林信康が「山谷ブルース」で嘆じてみせた心情を了解した。「だけど俺たちや泣かないぜ　働く俺たちの世の中が　きっときっとくるさそのうちに　その日にや泣こうぜ　うれし泣き」

すでに卯月。木々の若葉が目に沁みる。私の「青春」からは未だに一通の便りもない。彼らがすでに泉下の客になっているとすれば、なんと痛ましいことであることか。

【祝・米寿】有難うございました

矢部節子

米寿祝いをお届けしたところ、矢部さんより丁寧な礼状をいただきました。矢部さんの了承を得て高退協ニュースに掲載します。

高退協事務局

一月一日発行の高退協ニュース・【祝・米寿】の欄に、私の名前が出ていたので、「あれ、米寿なのだ・・・」と思いながら、懐かしい方々のお名前も拝見した事でした。

そしてある日、倉橋先生がお祝い金を持ってきてくださいました。倉橋先生は、亡夫矢部伸一郎の教え子で、確か矢部はサッカー等したことはなかったと思うのですが、顧問をしていたようで、若い頃の倉橋先生にはお会いした事が何度かありました。そして、先生が退職後に、高退協の役員をなさっている事は存じていましたが、あまりにも若々しくて以前と変わっていないので、「今、何処にお勤めですか？」と、言ってしまいました。自宅まで来て下さったのに、上がってもいただかず、失礼を重ねてしまいました。

重ねて、高退協の皆様、米寿のお祝い、本当に有難うございました。

私は私学教組の一員でしたが退職後に、亡西込暁さんのお誘いを受けて、高退協に入りました。

でも私は、大学卒業後の四年間は、小津、追手前、清水、宿毛に、臨時・時間講師として勤め、高教組に所属していました。それは、高校時代に山田高校の校長先生だった生永利正先生が、私の大学卒業時には小津高の校長先生でして、講師採用にお力添えを頂きました。そして、生永先生も高教組に所属だと教えられて、払も会員になりました。当時は、勤評闘争が華々しく、また、先生方の熱弁に圧倒され、そして又、生永先生や成瀬先他のあの処分・・・・・。高教組でのそんな時代がアッと言う間に過ぎてしまったのを思い出します。

そして、矢部伸一郎もアッと言う間に逝ってしまいました。五年後の令和八年には五十回忌を迎えます。清水と高知での遠隔別居結婚、やっと窪川に転勤になったものの、朝五時の一番列車で行き、帰りは九時頃、そして、佐川や小津では仲間に恵まれて飲んで帰ることが度々でした。丸の内では体調が悪く、皆様にご迷惑をおかけしたと思います。四十歳でしたので、私は彼の二倍以上も生きてきたのですね。

結婚を機に、高知学園に就職しました。公立よりも一号アップという事で挨拶に行ったところ、園長に「女も給料は同じかね？」と聞かれたので、私は「公立では同じできた」と返事をし、一号アップで採用になりました。ところが、知らないうちにアップ分が減らされていて、定年退職迄ずっとそのままでした。又、女にはホーム主任は駄目だと言ってバカにされましたが、これは子育て中の私にはラッキーでした。何しろ、家庭科と体育に女性が居るだけで、理科に女が初めて採用になったのですから、考えられなかったのでしょうね。そして、初任給九千八百円の時代・一年間に三日休んだことで、ボーナスを三千円引かれていたのは忘れる事ができません。何しろ、「結婚式も葬式も日曜日にせよ。」という厳しさ？でした。勿論、年休なんて、ずっと後々までありませんでした。そして、一クラス七十数名のクラスが、学年によっては五～八クラスもある、という大発展を成し遂げたのは、そんな園長だから出来たのでしょう。森（シンキロウ）発言の件は、今だから大問題にされていますが・・・・・・。

この様な状態の中で、亡西込暁さんが組合を立ち上げ、他の私学や幼稚園にも私学教組を広めていったのです。今では生活環境も変わり、過酷な環境に立ち向かう必要が無いのか、気力が無いのか、分かりませんが、私学教組を離れて、私学教組の存続がどうなったのか不明です。ですから、高退協の皆様から寄せられる情報や山歩き等の体験の有難さに、感謝しています。多くの先輩や仲間の方達に支えられての年月でした。

最後に、近況報告・・・チョットしたきっかけから、五十歳の手習いで油絵を描くようになり、県展に連続出品しています。そして又、運動神経最悪の私が、スイミングに明け暮れています。齢を取っても、教えを受け学ぶことは楽しい事ですね。

筆不精者の私、お礼の手紙がこんなにも遅くなりまして、申し訳ありません。

矢部節子

2021年第92回メーデー　行進　コウシン　ごうしん

ツーショット♡
小松さん、飯田さん